

平成19年度第4回政策評価委員会 摘録

平成20年3月26日(水)

いさご会館第7会議室 15:30~

議事1「平成18年度施策評価結果」に対する政策評価委員会の個別意見への対応について

委員 個別意見に対する市の改善の考え方の説明の中で、目標の妥当性、成果説明の客観性について、指標を用いていくという説明があったが、どのような指標を用いていくのか。

事務局 例えば、資料1「平成18年度施策評価結果に対する政策評価委員会の個別意見への対応について」の2ページの「各区の個性を活かした魅力あるまちづくりの推進」では、事業数などを指標に加えてはどうかと考えている。また、「宮前平・鷺沼駅周辺地区の整備」では、駅利用者のアンケート結果を指標に使っていきたいと考えている。

委員 今後は具体的な指標を示していくという方向にあると認識してよいのか。

事務局 これまでの委員会の中でも、参考指標ということで、できるだけ客観的、具体的にするために、適正な指標を用いながら説明すべきという意見があり、市でもそのための努力をしている。昨年の委員会での個別意見でも、指標の工夫が欲しいという意見があったので、それに対する考え方ということである。

委員 すべての施策に指標を設けることは難しいと思うが、少しずつ指標を増やしていただければと思う。

委員 個別意見への対応に関しては、4月、5月の検証作業の中でも、改善が図られているか、チェックしていただくということもあるかと思う。

議事2 平成20年度「施策進行管理・評価票」の検証方法等について

委員 今年も二人の委員で同じ施策を検証するが、昨年と同様に、各委員の意見は併記というか、そのまま整理していくということによいか。

事務局 検証の結果、二人の委員で、評価が4点と2点になった場合に、真ん中の3点でよいのかといった議論がある。そのまま、各委員の意見の延べ数で表した方がより客観性は担保されると考えているが、また、あらためて御議論いただければと思う。

委員 0点と4点とか、極端なものについては、抽出して、委員会として議論した方がよいと思う。それを平均化するのは最悪だ。意見が割れているものは、委員会としても議論が必要であると思う。

委員 私も意見が離れた場合に、足して2で割るのは改善策ではないと思う。視点が違ったり、背景にある知識量の差が大きく影響していると思われるので、委員の御指摘のように、評価が離れたものについては、別途、委員会で議論して、評価が離れた要因を分析することで、評価マニュアルの改善や市の関係部局へリクエストにも効果があると思う。

委員 いろいろ議論しても、意見が変わらなかった場合、両論併記ということでもよいのか。

委員 無理して、意見をいっしょにするということはない。委員会で議論して、不足していた部分を補うということはあるかもしれないが、各委員は自分の意見をしっかり出してもらえば、よいと思う。書く場合にどうなるかということがあるが、最終的には両論併記ということになる。

事務局 いまの議論を踏まえて、各委員の間で意見の隔たりが大きいチェックシートについては、委員会で御議論いただき、点数とは別に、マニュアルや考え方の統一化を図っていきたいと考える。

委員 加点項目を除いて、なぜ、×だったのかということを書かないと、所管課とのキャッチボールにならないので、そういう項目を書いていただいた方がよいと思う。私だけの問題かもしれないが、大きく3つの項目があって、なかなか判別のつかないものが多い。白・黒をはっきりさせないといけないのか。 と

×の間という考えはないのか。

委員 実際、チェックシートを書いていると、3.5だが4ではないというものがある。資料3「平成20年度「施策進行管理・評価票」検証マニュアル(案)」5ページの一番下の加点項目を活用して検証していくというのが現実的ではないかと思う。

事務局 前回の検証作業の反省点を踏まえて、このような形とさせていただいた。×の区分については、50%かどうかというところで評価していただき、足りない部分は、コメントの中で補足していただければと思う。

委員 昨年のチェックシートだと、3つの項目を総合して評点を付けられたので、四捨五入して2点というような評価ができたが、今年のチェックシートだと、項目ごとに×かを評価するので、すべての項目が×だと0点になってしまう。去年よりも厳しい結果となるのではないか。

事務局 昨年のチェックシートでは、「妥当である、概ね妥当である、検討を要する、抜本的な見直しを要する」という4段階の区分のみが記載されており、視点についてはマニュアルにだけ書いてあった。このため、チェックシートを見た担当課には、内容が明確に伝わらなかった。

委員 となると、今年のチェックシートでやった場合に、僅差で×になったという時にどうなるかという問題がある。これについては、やはり、定性的にコメントで対応していくというところではないかと思う。

委員 目標の明確性や説明の客観性といった、このマニュアルの考え方が市役所内に浸透していれば、そう厳しい結果にはならないのではないかと思うが、そのあたりのところはどうか。

事務局 なかなか難しいところではあるが、3か年の実行計画の3年目の評価ということで一つの節目であり、どこが問題なのか明確にして、20年度以降始まる第2期の実行計画における評価の改善へとつなげたいと考えている。

委員 ある程度の厳しい結果が出る可能性はあるが、現在、部局で行われている評価が厳しい検証に耐えられるものなのかどうか、一度、やってみるということではないか。

事務局 あるいは というものを入れるかどうかだが、その意味合いが分かりにくい。

委員 今回は、かなり厳しい結果になると思うが、そうなった場合は、どう改善していけばよいかということを政策評価委員会で提案してもよい。

委員 感覚的な表現になって、この場で決められないと思うが、 と×の判断の考え方を全体を通して、まあまあ我慢できるものは にするのか、改善の余地のあるものは全部×にするのか、どちらにするのかで、大分変わってくる。

委員 実際にやってみると、その判断はなかなか難しい。全部×にすると、なぜ×なのかという説明責任の問題や担当課に与えるモラルの問題等を考えると、市民に対して、ある程度説明責任を果たしている場合には、総合的に考えてという判断もあるのではないか。

事務局 最終的なチェックマニュアルとして、各委員にお送りするものは、委員長を含めて御意見を伺いたいと考えている。批判的に見ていただくということも必要だが、公表に当たっては評価の改善に向けて取り組んでいるということが市民に理解していただけるようにしたい。その辺のスタンスをもう少し明確にした上で、4月以降の検証をお願いしたいと考える。

委員 前回、検証した際に、解決すべき課題が書かれていないものが多かった。資料3「平成20年度「施策進行管理・評価票」検証マニュアル(案)」の3ページにあるように、行政運営を行っている中で、いくつかの問題があって、その対応をすべきであるということを記述する必要もあると思うが、それ以外に、川崎市の各種計画の中で位置付けられているというように、課題となる根拠を示していただけると分かりやすい。

事務局 それについては、マニュアルの方に反映させるようにしたい。

委員 チェックシートの、2「成果の説明について」の(3)「説明の分かりやすさ」にあるチェック項目「専門用語や難解な言葉は使用されていないか」について、 か×か、ということだが、この線引きが非常に難しいのではないかと思うが、だいたい7割くらいできれば、 とかということが示されていると、検証しやすいのではないかと思う。

委員 それについては、前回の検証では、各委員の判断に委ねるということで行った。今回の検証も同じ考え方でよいのではないかと思う。

議事3 施策評価等に関する庁内アンケートの結果について

委員 その他意見の中で、評価票の記入の困難性、評価することの困難性ということが示されていて、私も検証させていただく中で、ここが一番難しいと感じている。特に、複数の課にまたがった場合の調整は非常に大変だろうし、目標値の設定なども非常に苦労されていると思う。こういったことによって、明確な目標なり、施策の課題が明示できないような場合、それを無理に書かれると、こちらとしては、それに対する評価しかできないわけだから、×というのは、そういった困難性に対して適切に応えられるのかと感じている。

委員 第1回目の政策評価委員会で、指標といったものが、それぞれの事業なり施策なりの評価のためには必要で、それに対して、何%達成できているかということが説明できれば、数量的な説明ができて、非常に分かりやすいということで、どういった指標がよいのかということを検討した。ただ、指標の設定の仕方が非常に難しい事業の場合、メタ評価を行っている政策評価委員会としての限界もあり、それについては、指標の設定について改善が求められるという意見に留めた。しかし、他の委員からも意見があったように、今後、指標についてもやっていく必要があるのではないかと思う。

事務局 そういった御意見もあるので、指標が達成できたとかできないとかで、事業がうまくいっているとか、いっていないとかということには、ならないと考えている。施策課題レベルだと、一つの指標がよくなったからといって、施策全体がうまくいっているということには、なかなかならない。参考指標という言葉を使って、部分的に指標を用いながら、状況の変化や成果の一部分を客観的に示すように担当課にはお願いしている。その考え方には、基本的に変わりはない。プロセスが大事であると考えていて、担当課とキャッチボールをして評価の質を上げることと、そうすることによって、事業をマネジメントする能力をしっかりとつけていくことができると考えている。分かりやすく市民に公表するという意味で、分野別、政策領域別に指標を整理して見せていくということも必要なのではないかと考えている。

委員 この委員会で議論するかどうかは別にして、複数の課に渡ったものの困難性については、どんな原因なのかを究明しておく必要がある。組織の縦割りだと

か、問題が多岐にわたり過ぎていて目標設定ができないとかいうのであれば、プランの部分で切り分けをするなり、統合をするなりということが必要なのではないかと思う。

事務局 基本的に政策体系があって、予算があって、組織がある。それぞれが連携していることが望ましく、川崎市は、それぞれができるだけ連携するように計画を策定しているが、まだまだ、十分でない部分もある。評価の場合、局をまたがる場合もあり、どうしてもお互いの意見が食い違ってしまうこともある。いずれにしても、委員の御指摘のとおり、少し具体的に状況をつかんでいく必要があると考えている。

委員 課題に感じた点だが、質問3の「市民への説明責任」という項目で、担当課で事務事業点検なり施策評価の結果を使って、対象となる市民に説明する機会は少ないのかなと思う。評価の結果をホームページで公表しても市民からの意見は少なく、もう少し市民の方に見てもらいたいという感想を持っている。折角、これだけの労力をかけて取り組んでいる活動なので、いろんな場面で、市民の方々と市の施策を議論する時の材料として活用していただければと思う。

委員 パブリックコメントの手続を取るような場面では、市民の意見を問う場面もあるのか。

事務局 新しい制度を作るということではないので、パブリックコメントの手続は取っていない。総合計画や自治基本条例を策定した際の市民委員の方々に評価結果を説明したことはあるが、一般の市民の方に説明をしたことは、残念ながらない。インターネット等で公表している。

委員 いずれにしても時間と労力をかけているので、いろんな人に知ってもらうことが必要だろう。引き続き、継続案件として考えていくこととする。

事務局 是非、今後の委員会の議論の中で、御意見や考え方を頂戴できればと思う。

議事 4 その他

委員 評価の取組について、議会ではどういった議論がされているか。

事務局 議会についても、これまで過去2回の進捗状況の冊子を委員会で報告している。大変熱心に取り組んでいるということについては、評価を得ているが、目標設定や自己評価が甘くならないかといった意見をいただいている。

委員 評価の結果を受けて、議会で議論が深まっているということはあるか。

事務局 本会議でも質問が出ており、委員会でも議論させていただいている。

委員長 他に意見がなければ、質疑は以上としたいが、いかがか。

一同 異議なし。